

大学院の特徴

社会を変革できる人材を養成

これまでの常識や慣例にとらわれることなく、確かな課題意識と豊かな想像力と着実な実践力をもって、地域および世界の21世紀的課題に果敢に挑み社会に変革をもたらす、「イノベーション人材」を養成します。今やイノベーションは、スマートフォンや自動運転などの世界を変えてしまレベルから、目の前の生活を改善していくレベルまで、あらゆるレベルが必要とされています。これまでのものごとのあり方を見直し、新機軸を提案できる人材養成をめざします。

個々の大学院生に合わせた学びを展開

大学院での学びの基本は「専門性を深める」ことにありますが、今日においては、「俯瞰性・学際性」や「課題解決力」、「コミュニケーション能力」なども求められます。福島大学大学院では、人文・社会・自然という枠組みを超えた「総合知」の修得をめざして、高度な専門性を軸に「学際性重視型」と「専門性重視型」の2つの履修パターンを設定※し、大学院基礎科目「イノベーション・リテラシー」の必修化、「プロジェクト研究」「課題対応型プログラム」などを導入し、自分のニーズや興味・関心に合わせた学びを展開することができます。

※(教職実践研究科)及び(地域デザイン科学研究科人間文化専攻人間発達心理コース臨床心理領域)では、履修基準が異なるため「専門性重視型」のみとなります。(食農科学研究科)は、開設時は「専門性重視型」のみ設定し、3年目以降に「学際性重視型」の履修パターンを設定する予定です。

教員からのメッセージ



地域デザイン科学研究科
人間文化専攻担当
教授
初澤 敏生

社会科学的な視点で「文化」を照らしていく

「文化」とは、非常に曖昧な概念です。茶道や華道のような長い歴史を持つ儀式や芸術等がある一方で、マンガやアニメ、ゲームなども日本を代表する文化とされています。そのため、一口に「文化」と言ってもその存立基盤や伝承形態などには大きな差があります。私のゼミでは様々な文化を主に社会科学的手法を用いて調査・分析することを通して、その実態を把握するとともに、構造や特徴などを明らかにする研究を進めています。また、近年は文化を活用した地域づくり・地域振興も盛んになっており、それらの研究も視野に入れています。「文化」に関心を持つ多くの方々の入学を期待しています。



教職実践研究科(教職大学院)
教職高度化専攻担当
教授
鶴巻 正子

理論と実践の往還で、教員に求められる資質能力アップを

大学院再編により福島大学の教職大学院は「教職実践研究科教職高度化専攻」として独立します。新研究科には、ミドル・リーダー養成コース、授業デザインコース、特別支援教育コースを設け、「共通5領域」には「授業デザインの理論と実際」を、「選択領域」の学校改革領域には「ミドル・リーダー論と実際」を、同じく授業改善領域には「(教科等)の授業デザイン論」「ICTを活用した授業デザインと実際」「教育実践研究のためのデータ処理論」「インクルーシブ理念と障害理解教育論」など新規の開講科目を用意し、理論と実践の往還、深化・展開・発展を保障することでここからの教員に求められる資質能力をもつ人材の養成をめざしていきます。



共生システム理工学研究科
共生システム理工学専攻担当
教授
大山 大

クリーン・エネルギーの最先端を学び、地域を動かしていくために

現在、世界中の国々がカーボンニュートラル(CN)の実現をめざしていますが、私たちは化学の力でCNに貢献したいと考えています。例えば、CO₂フリーのグリーン・エネルギーとして水素が注目されています。私たちの研究室では、金属錯体を基盤とする様々な触媒分子を開発し、それらを用いて水素などのグリーン・エネルギーの創出や利用法について研究しています。東日本大震災による原発事故を教訓に、福島県は全国に先駆けて水素を含む再エネの導入を積極的に進めています。新しいエネルギーの活用をリードする地域にある福島大学大学院でグリーン・エネルギーを研究することは、とてもエキサイティングな経験になるでしょう。



地域デザイン科学研究科
地域政策科学専攻担当
准教授
西田 奈保子

地域課題を解決に導く市民や高度専門職業人を養成

大学院では、ご自身が「わかりたい」と考えていることと、教員とのマッチングが重要です。本専攻には、法、政治、行政、社会学等の幅広い分野の教員が揃っているため、入学を検討している方はまずは自らの問題関心について、私たちに気軽に相談してみることをおすすめします。多様な分野の教員が教育に関わることで、大学院生は自らの問題関心を多角的な視点から検討し、再定義しながら深堀りしていくことが可能になります。私自身の専門は現代行政の分析で、様々な政策領域に適応する事象への関心をもっています。主な研究方法は政策過程分析と計量分析です。近年は災害行政における課題設定と政策実施の研究に力を入れています。自治体行政が、国と地域社会のあいだで挑戦できることを、私たちと一緒に見つけませんか。



地域デザイン科学研究科
経済経営専攻担当
准教授
藤原 遥

地域の未来を構想する公共政策の担い手養成をめざします

本専攻では、地域社会における様々な問題に対して、論理的に分析し解決策を見出し、それを実践していく能力を養成するカリキュラムを提供しています。さらに、地域の未来を構想する公共政策の担い手養成をめざす「地域公共政策プログラム」が新設されます。他専攻とも連携して、法律、公共政策、地域経済、歴史、文化、環境、自治体や地域企業の経営といった幅広い領域の科目を揃えています。その中で、私は、「地域政策論特殊研究」を担当しています。住民主体の地域づくりをするための住民参加型行政システムについて、国内外の先進事例を調査し、身近な地域で実践するための方法を受講生と一緒に考えていきたいと思っています。



共生システム理工学研究科
環境放射能科学専攻担当
教授
ヴァシル・ヨシェンコ

森林放射生態学の理論と実践的スキルを身に付ける

本専攻では、生態系を理解するトレーサーとして重要な放射性核種の環境動態や影響について学び、原発事故被災地の復興に関する諸問題に取り組む力を養います。私が行っている放射性セシウムの動態研究は森林生態系における元素循環の生化学的基礎知見や、植物の形態形成過程の解明につながる可能性があります。これらの研究は、福島県林業再生に貢献すると同時に基礎科学でもあるのです。私の授業では、講義とフィールドワークを通して、森林放射生態学の理論と実践力を身に付けます。また、最新の解析手法や最高水準の装置を用いた分析を含む実践科目、国内外の著名な研究者による講義も用意しています。国際的な視野で地域に役立つ研究を一緒にに行いましょう。



食農科学研究科
食農科学専攻担当
准教授
岡野 夕香里

食と農の様々な課題を地域の人々と関わりながら学ぶ

食農科学研究科は、食と農をキーワードとする研究科です。日本や福島の農業が抱える震災復興、環境問題、後継者不足などの様々な課題を解決するために、多様な分野の先生が集まり、研究に取り組んでいます。そのため、広い視野から自分の研究の位置づけを捉えることができ、様々な助言をもらうことが可能です。また、地域の農家さんや食・農業関連の企業、JAなどと連携した研究が多いのも特徴で、自分の研究が社会にどの様に貢献するのか、実感を持ちながら研究することができます。校舎は新しく、自然豊かで集中できる環境です。ぜひ食農科学研究科と一緒に研究にとことん打ち込みましょう。

福島大学 大学院が 新しくなります

令和5年4月から

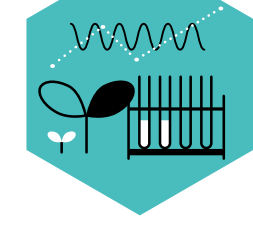
21世紀的課題に立ち向かう〈力〉と〈意欲〉は
〈大学院〉で身につける



地域デザイン科学
研究科



教職実践
研究科



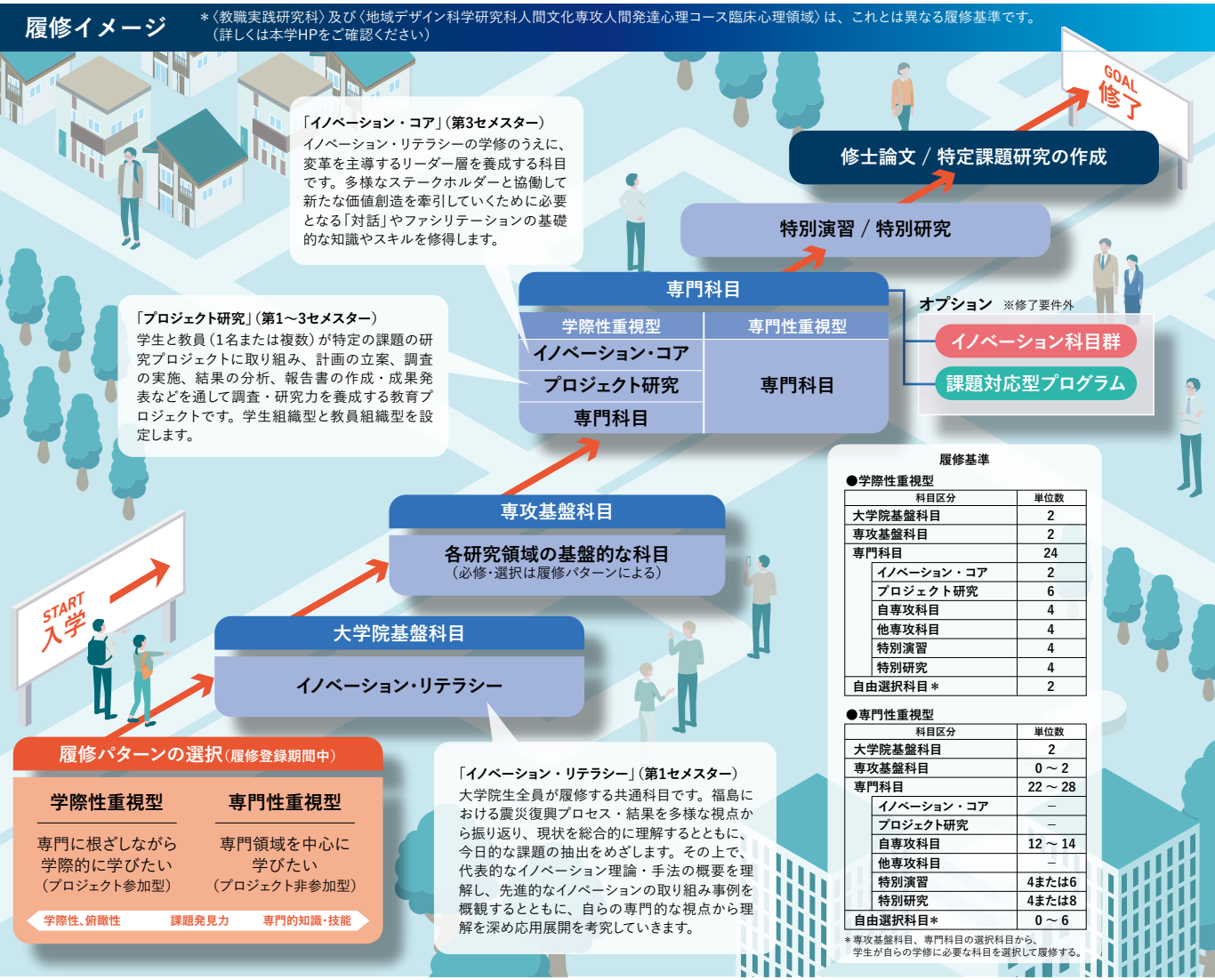
食農科学
研究科



共生システム理工学
研究科



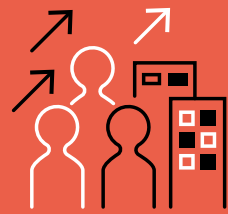
食農科学
研究科



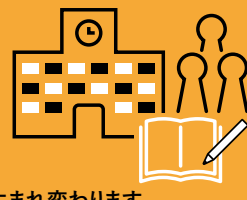
地域デザイン科学研究科

人・コミュニティ・経済を「リ・デザイン」

人文系・社会系の3研究科を統合して、「地域デザイン科学研究科」として新設します。「人間・文化」、「法・政策・コミュニティ」、「経済・経営」という3つの領域において、アカデミックな研究と地域社会における実践を融合することによって、新たな知を創造し、豊かな地域社会をデザインしていきます。



教職実践研究科



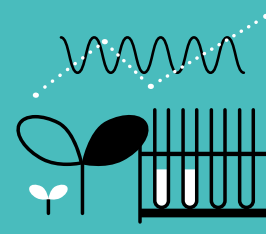
教育を通して社会を変える

専門職を養成する大学院として、独立した研究科に生まれ変わります。福島県の教育を牽引できるミドル・リーダーを養成することを目的に、現職の教員と学部から進学した学生が共に学校現場での実習と議論を積み重ね、ICTなども含めたこれからの時代に必要となる教育を開拓していきます。

共生システム理工学研究科

人と自然が共生できる技術を創造

理学と工学の高度な専門性に加え、人—産業—環境における共生の新たなシステム科学を構築し、21世紀的諸課題の解決をめざします。カーボンニュートラルや福島としては不可避の環境放射能の問題、ICTや環境問題など、現代的な課題にも取り組みながら技術者・研究者を育てていきます。



食農科学研究科

食と農で持続可能な社会を

食農学類の学びを継続・発展させ、福島県の農林水産業と食料・食品関連産業を発展させるための人材を養成します。被災地域における新たな経営・生産方式の導入、「ふくしま」ならではの高付加価値化の取組や環境と共生する農林水産業の推進といった福島県が抱える固有の地域課題の解決に取り組みます。



人間文化専攻

言語文化コース | 地域文化コース | スポーツ・芸術文化コース | 人間発達心理コース

佐藤 大寿

人間発達文化研究科 2年

美術で地域を変えていく。
人の気持ちに寄り添いながら、
想像を超える感動を。



修士課程
大学院生
(ストレート
マスター)

私の研究テーマは「絵画と文学」です。これらは現代では別個に存在していますが、歴史的に見ると一体として捉えられてきたという背景があり、それがどこで分岐したのか理由を解明するとともに、自分の絵画制作にも反映させています。

美術と地域も一見するとかけ離れたような存在に見えるかもしれませんが、芸術はど人の内面を映し出すものはありません。誰かを穏やかな気持ちにしたり、傷つけた心を癒やしたり、コミュニケーションを生み出すきっかけにもなります。「美術で地域を変えていく」という考えもあると感じています。

私は当初教員志望で、専門的な知識や具体的な技術を修得するために大学院に進学したのですが、地域との関わりを深めていく中で、美術に関する知識や技術を活かせる場所が他にもあるのではと気持ちが変化していきまし。内定をいただいたのは、造園デザインをはじめ、インテリアとして観葉植物を使い空間をデザインする仕事です。

私の考える大学院は、知識が拡散する場所。教授陣は様々な分野に精通しており、世界を広げてくれます。そこから見える風景は、想像を超える感動にあふれています。



インタビュー動画はこちら
(約5分40秒)

地域政策科学専攻

法・政策コース | コミュニティ探究コース

尾崎 重治

地域政策科学研究科 2年(長期履修)

たくさんの人と触れ合っていく中で、
自分の考えが明確になっていく。
そのプロセスが学びの醍醐味です。

会津若松市で公務員として働いています。仕事柄、以前から教育と福祉の連携に興味があり、大学院で学び直そうと思ったのがきっかけです。研究テーマは「子ども食堂」。会津地方の子ども食堂は、他の地域と比べると数が少ないのですが、需要が低い理由はなぜなのか。また、子ども食堂に行かなくても済むような社会づくりを考えたときに、その居場所として「学校」を使えないか、という考察を深めています。研究の中では、実際に中学校の校長先生にインタビューする機会があり、とても参考になりました。実践的な学びができるのは、大学院ならではのと言えます。

大学院という、確固とした目標や志がないと駄目なのではと思う方もいるかもしれませんが、そんなことはありません。私の場合、大学院に入ってから様々な人々と触れ合うことで自分の考えが固まっていくのを感じました。そのプロセスも大学院の学びの醍醐味ではないでしょうか。教授陣も院生一人一人の予定に合わせて丁寧なカリキュラムを組んでくれますので、本当にありがたいです。これからは大学院で得た知見を活用して、地域に貢献していきたいと考えています。



修士課程
大学院生
(社会人)



インタビュー動画はこちら
(約6分15秒)

経済経営専攻

経済学コース | 経営学コース

氏家 健人

経済学研究科 2年(長期履修)

実際の現場はどうか？
理論の先にあるものを
大学院は照らしてくれる。

修士課程
大学院生
(社会人)



現在、金融機関のシステム部門に勤務しています。金融機関を取り巻く環境がデジタルの進展で大きく変化していく中で、私も金融機関の一員としてどのような行動を取るべきなのか考えるようになりました。福島大学の大学院には、社会人向けにビジネスリテラシーの向上を目的としたプログラムがあることを知り、入学を決めました。

私の研究テーマは「日本のキャッシュレス決済の普及について」です。消費者がモバイル決済を採用する要因をはじめ、どうすればキャッシュレス決済が日本に浸透していくのかを分析しています。

経営学を専門に学んでいますので、経営理論やマーケティングのフレームワークといった講義があります。一般的な講義はここで終わりますが、大学院では「実際の現場はどうか？」という議論を交わします。教授をはじめ、私たち社会人や学生、そして退職されても学び続けている方などが入っている議論はとても刺激的で、地域を変えていこうという熱意に満ちています。

21世紀的課題を解決するための最も必要なファクターは「学ぶ姿勢」だと思います。自分のキャリアは自分で作る。そのための最高の環境がここにあります。



インタビュー動画はこちら
(約5分45秒)

教職高度化専攻

ミドル・リーダー養成コース | 授業デザインコース | 特別支援教育コース

鹿又 悟

人間発達文化研究科(教職実践専攻) 1年

自分たちの暮らす地域の
魅力や素晴らしさを
子どもたちに伝えるために。

小学校教員として今年(令和4年)で13年目になります。大学院に入学した理由は、これまでの教育現場での実践に加えて、理論をしっかりと学びたいと思ったからです。教職大学院は、理論と実践の往還による総合的なプログラムを組んでおり、振り返りながら研究できる点にも魅力を感じてエントリーしました。

現在取り組んでいるテーマは、持続可能な開発のための教育(ESD=Education for Sustainable Development)です。ESDを実践しているユネスコスクールの教科横断的な進め方を、現在の学習指導要領に展開していくにはどうすればよいかを研究しています。

自分の暮らす地域の課題を見つけたり、それを調べて発信することが、学校教育では今後ますます重要になってきます。私は東日本大震災の年に教員となりましたが、この年は福島県での採用がなく、私は5年間東京で教職に就きました。このとき福島県のもつ地域の魅力や素晴らしさをあらためて実感しました。自分の生まれ育った地域を愛し、誇りに思えるような心を、子どもたちにも伝えていきたいと考えています。



専門職学位課程
大学院生
(現職教員)



インタビュー動画はこちら
(約6分30秒)

共生システム理工学専攻

数値・情報システムコース | 物理・メカトロニクスコース | 物質・エネルギー科学コース | 生命・環境コース

丹治 珠緒

共生システム理工学研究科 博士前期2年

廃炉研究の最前線に立つ人たちの情熱を
地域にどうやって発信していくか。
それが私の新しい研究テーマです。



博士前期課程
大学院生
(ストレート
マスター)

現在、大学院で燃料デブリの組成解析を研究しています。燃料デブリとは、原発事故の後に、原子炉の中にある構造物と燃料と一緒に冷え固まったもので、高濃度の放射性物質を含んでいることから廃炉作業を妨げている要因のひとつになっています。燃料デブリを構成する材料由来の多変量化学分析データを、計量化学の技術を用いてプロファイルする手法の開発等に取り組んでいます。

福島県が抱えている「廃炉」は、この時代に解決しなければならない課題です。研究では、ディスカッションの他にも、実際に福島第一原子力発電所に足を運び、廃炉作業のリアルや研究に携わっている人たちの情熱に触れることができ、大学院ならではの学びを実感しています。

大学院に入学した当初は、研究論文を数多く書いてみたいという思いが先行していたのですが、廃炉研究の最前線を学んだ今は、「廃炉のマイナスイメージを克服して、次代の子どもたちが誇れるような福島県を残したい」「廃炉研究がどこまで進んでいるか、地域に向けて丁寧に発信したい」という思いが強くなりました。学ぶ力だけではなく、伝える力をここで学び、将来は研究職に就きたいと考えています。



インタビュー動画はこちら
(約5分40秒)

環境放射能学専攻

環境放射能学コース

黒澤 萌香

共生システム理工学研究科 博士後期1年

福島原発事故の研究は、
日本の様々な問題につながっている。
柔軟に未来を考える仲間がここに。

学類での研究をさらに深めたいと考え、大学院に進みました。現在の研究テーマは「ため池における¹³⁷Cs動態研究」です。除染をしたため池でも、その後の集水域からの流入で底質の¹³⁷Cs濃度が上昇するのではないかという懸念があるため、底質を7地点、流入水、流出水、池水を9箇所から採取し、¹³⁷Cs濃度を測定しています。サンプル数が多いため、分析作業は大変ですが、都市にあるため池や除染後の長期的観測を行った研究は少ないため、達成感も大きく、やり甲斐があります。

原発事故に関連する研究を通して、最近では福島県に限らず地域の様々な問題や課題を考察するようになりました。大学院では、これらの問題を堅苦しく考えるのではなく、柔軟にものごとを捉え、意見を交わせる先生や仲間がいます。私が描く地域の未来像は「おいしいものが、おいしいと評価される社会」。安全なものが評価される世の中になってほしいと考えています。

余談ですが、大学院では、英語でプレゼンテーション、研究成果を報告する機会が多く、英語に対して苦手意識がなくなったのは思わぬ収穫でした。



博士後期課程
大学院生
(ストリート
ドクター)



インタビュー動画はこちら
(約5分10秒)

食農科学専攻

食品科学コース | 農業生産科学コース | 生産環境科学コース | 農業経営科学コース

佐藤 優花

食農学類 4年

農業を空から考えるリモートセンシング。
「福島県農業」をたくさんの人たちと
ふれあいながら変えていきたい。



学士課程
学生
(大学院志望)

東日本大震災が起きたとき、私は小学5年生でした。子ども頃から農業が好きで毎年田植えを手伝っていたのですが、震災を機にできなくなってしまい、ぼっかりと心に穴が空いたような寂しさを感じたことを覚えています。

現在取り組んでいる研究テーマは「農業リモートセンシング」です。ブドウ畑にマルチスペクトルカメラを搭載したドローンを上げ、上空からブドウの生長を段階的に把握。また、葉っぱの反射率を測る機械を使って、ブドウの病気の進行具合を把握するという研究を行っています。

福島大学での学びの一番の特徴は、地域の人たちとのつながりがとても多いことです。座学だけではなく、県内の農家さんから話を直接聞くことで、福島県の農業の課題や実情をじっくりと学ぶことができます。震災を機に農業を失った地域、または農業の再生に向けて歩み始めた地域に積極的に関わることで、「福島県農業」をマクロな視点で捉えることができるのは、福島大学ならではの学びです。将来は、子どもから高齢者まで誰もが何らかの形で農業と関われるような、そんな地域をつくるためのお手伝いができたらと考えています。

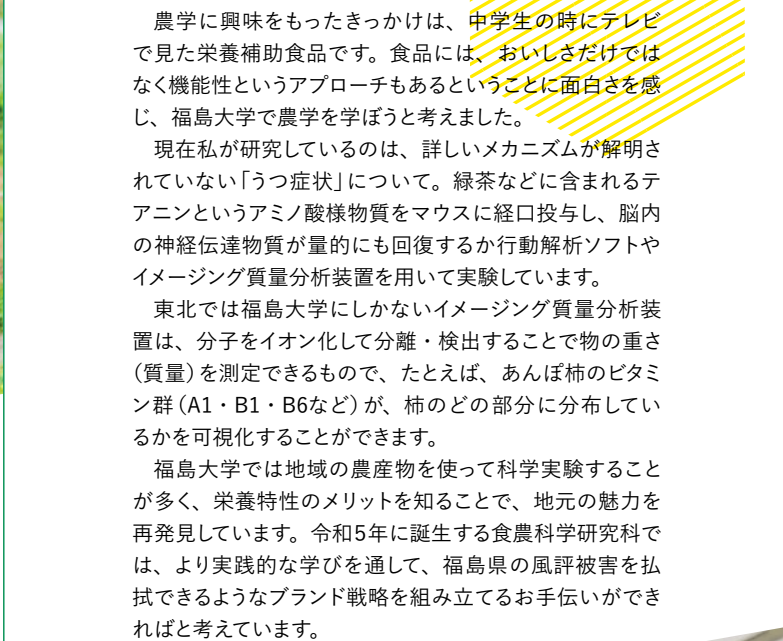


インタビュー動画はこちら
(約6分50秒)

武藤 誠

食農学類 4年

農産物の栄養特性を
「可視化」する。
福島発、ブランド戦略



学士課程
学生
(大学院志望)



インタビュー動画はこちら
(約5分30秒)